

シーサイド コンサルティング
(株) Seaside Consulting
きよなんまち
 (千葉県鋸南町)

(株) Seaside Consultingの平野代表取締役は、日本の漁獲量の低迷と共に、海外からの輸入が増えていること、全国の港町が廃れ、田畑の遊休農地化が止まらない現状を憂い、日本の高度成長期並みの成長をし続けているバナメイエビの陸上養殖を使われなくなった農業用ハウスを使って行っています。

バナメイエビは3~4か月で出荷でき、回転が非常に良い一方、水温を28℃前後に保たねばならず、水温を維持するためのコストが課題です。

平野代表取締役は、エビの養殖は子育てと同じ。今水槽にいるエビは9月中旬からのもので、子育て四訓で言う「乳児はしっかり、肌を離すな」の状態。との言葉に平野さんのエビへの熱い想いを感じました。



養殖場を見ながら説明を受ける議員



1cmの稚エビが3週間で約7cmに



工場のような設備の養殖現場



ブランド名は「おかそだち」

(株) FRDジャパン
 (千葉県木更津市)

(株) FRDジャパンでは、年間約30トンの実証実験プラントを視察しました。実際のプラントは水槽の周りに水をろ過するための機械やサーモンを移動させるための吸引機など、まるで工場のような環境でした。

ここでは水道水にサーモンの成長に必要なミネラルなどの成分を混ぜた水を使用しているのが特徴です。日本の水道水は非常にきれいで、魚病の原因となるウイルスや細菌のリスクを低減できることから、安定した生産が可能とのことでした。

来年からは年間約2000トンを生産できる商業プラントの建設を開始。その事業費は当町の年間予算に匹敵するほどの一大事業と言えます。

当町でも養殖しているトラウトサーモンは、まだまだ成長が見込めそうです。

おわりに

3日間の視察で共通して学んだことは、陸上養殖は技術的ハードルが高いものの、世界的な需要の高まりによってまだまだ成長を続ける市場であるということでした。

世界的には人口が増え続けている中、日本で今まで食べられていた魚を輸入することができないという事態も想定されます。千葉県鋸南町の平野さんは、陸上養殖は中国がダントツ。日本の技術力があれば、地方の活性化、港町の復興に寄与できると力強く話していました。

この成長する市場に山田町としてどのように取り組むことができるか、廃校施設の活用、遊休農地の解消など、引き続き議論を加速させる必要があると感じました。

引き続き、委員会では当町での陸上養殖の実現可能性について調査していきます。